

Japan IFC 2017: 43名のHBS 学生が東北の起業家から学んだもの

HBSの2年生向け選択科目であるJapan IFC (Immersive Field Course) が2017年1月に開催されました。2011年の東日本大震災を受けて行われた第1回以降、竹内弘高HBS教授の授業として非常に人気のあるコースに発展し、数あるIFCの開催地の中で日本は唯一6回連続の開催国となっています。今年は「東北：真正なアントレプレナーシップの世界的な実験場」をテーマとし、1月4日から13日の10日間、東京と東北で開催されました。

Japan IFCに参加したのはHBSの2年生43名。出身はアメリカ、カナダ、インド、イスラエル、韓国、レバノン、ホンジュラス、クロアチア、台湾、バングラディッシュ、ラトビア、マレーシア、そして日本。日本滞在の間に学生たちは、①チームに分かれ9つの東北の企業にコンサルティングを提供、②被災地の現状を学び、そして貢献する活動に全員で従事、③様々な日本文化体験、という主に3つの活動に取り組みました。



INTILAQ 東北イノベーションセンターにて起業家の方々と HBS 学生



秋保温泉の旅館での夕食

東北の企業へのコンサルティング

このコースの最大の柱は、学生がチームに分かれて行う東北の企業へのコンサルティングです。今年は2011年の震災後に立ち上げられたNPOや社会起業家、スタートアップや長い歴史を持つ日本酒メーカーなど9つの企業・団体にプロジェクト・パートナーとなっただき、チームに分かれて今後の事業戦略や海外進出についてのアドバイスをを行いました。プロジェクト・パートナーの方々はビジネスや活動を通じて地域に貢献する熱い思いを持っています。

2017年プロジェクト・パートナー

- 秋保ワイナリー（東北の復興のために設立された宮城県唯一のワイナリー）
- 百戦錬磨（震災後に仙台を本社として作られた観光事業のベンチャー）
- 一ノ蔵（長い歴史を持つ宮城県大崎市の日本酒メーカー）
- モリウミアス（雄勝町の廃校になった小学校を再生した自然学校）
- 東北開墾（食のつくり手を特集した情報誌と、収穫した食べものをセット届けるサービスを提供し、生産者と消費者をつなぐ取り組みを行う団体）
- 愛さんさん（障がい者雇用を促進し高齢者向けの宅食サービスを地域に提供する会社）
- アスヘノキボウ（女川のまちづくりに取り組むNPO）
- みなとまちセラミカ工房（震災後起業し、スペインタイルの制作販売を行う社会起業家）
- 東北風土マラソン（東北の地元の食べ物を楽しみながら走るマラソン大会の運営組織）

東京で事前の市場調査等を行った後、学生達は東北でプロジェクト・パートナーと3日間過ごし、プロジェクト・パートナーのビジネスの成長のための提案作りに取り組みました。

プロジェクト・パートナーの1つである、愛さんさんは障がい者雇用を促進し高齢者向けの宅食や介護サービスを提供しています。学生チームのプロジェクトは、まず愛さんさんのスタッフに同行し、顧客にお弁当を届けるところから始まりました。学生チームは最終日に、会社を成長させつつ、あたたかみのある企業文化を守ることができるような組織プロセスの改変を愛さんさんに提案しました。学生チームメンバーのアンソニー・テリージは、「増加している高齢者の方々に素晴らしい介護サービスを提供することと、障がい者雇用の2つの壮大な社会的課題にチャレンジする愛さんさんに感銘を受けました。」とプロジェクトを振り返りました。もう1人のメンバーのスニタ・レディーは「愛さんさんは、優しさや喜びを顧客や従業員に届けており、単なる弁当宅配にとどまらない会社です。」と感想を述べました。愛さんさんCEOの小尾氏と管理者兼サービス管理責任者の加藤氏からは「HBSの学生からエネルギーと刺激をいただき、また5年後に再会したいです。」とのコメントをいただきました。



愛さんさんチーム



東北開墾チーム

東北での全体活動

女川町訪問

女川町は東日本大震災で 14.8m の津波に襲われ、9%の町民を失った被害の大きかった町の1つです。被害が大きかったにもかかわらず、女川町は驚くべきスピードで町の機能を回復し、復興のロールモデルとして知られています。女川町は世界三大漁場の1つのでもあります。HBS 学生の一行は女川で半日を過ごし、町長にお会いしたり、地元の水産会社の方とディスカッションをしたり、震災後に建設されたショッピングセンターを散策したりなどしました。プロジェクト・パートナーとしてもお世話になったアスヘノキボウの方々がフューチャー・センターで企画をしてくださいました。

最初のセッションでは、須田町長が震災後のまちの再建や、まちの将来のビジョンについてお話いただきました。HBS 学生達からの質問に、須田町長はユーモアたっぷりに答えてくださいました。学生達は、須田町長のリーダーシップやビジョン、そして実行する力に刺激を受けました。

次のセッションでは、株式会社鮮冷のマーケティング担当の大井氏より、暖流と寒流がぶつかる豊かな漁場である女川町の水産業についてお話いただき、最新鋭の冷蔵冷凍施設を持つことで競争力を高めることができたということをお伺いしました。大井氏の説明の後、竹内教授によるファシリテーションで HBS 学生のブレインストーミングセッションを行い、女川の水産業の可能性を引き出すためのアイデア出しを行いました。

HBS 学生は最後に地元の名産が楽しめるショッピングセンターを散策し、女川町訪問を終えました。

INTILAQ での東北の起業家との交流

HBS の卒業生である竹川隆司氏(MBA 2006)が関わり東北の起業家たちのコミュニティを育てている INTILAQ 東北イノベーションセンターにて、仙台市の後援をいただいて HBS 学生のために特別イベントを開催いただきました。セッションでは 3 人の地元の起業家にお越しいただき、HBS 学生と活発なディスカッションを行いました。まず 1 人目のスピーカー、株式会社セッションナブルの梶屋 陽介氏に、地元で手に入る木材を使ってギターを製造し販売するビジネスをなぜ、またどのようにして始める事になったのかをお話いただきました。梶屋氏はアメリカ市場に参入したいと考えていたため、HBS 学生は音楽祭や、この革新的なギターの良さを分かる顧客に広めてくれるようにミュージシャンに協力をお願いする等、提案を行いました。2 人目のスピーカー、一般社団法人イトナブ石巻の代表 古山 隆幸氏は地元の若い世代にプログラミングを学び、一緒に取り組む拠点を提供し石巻から世界に挑戦できる環境をつくるための取り組みについてお話いただきました。ディスカッションでは教育機関と連携して修了書を発行することや、工学分野への女性の参画を増やすために女性をもっと巻き込むことや、続けやすいように参加生徒達に学校でもクラブを作るよう働きかける等の、興味深いアイデアを HBS 学生が提案しました。3 人目のスピーカー、株式会社マテリアル・コンセプトの小池淳一氏は太陽光の材料である銀ペーストを自社製品の銅ペーストの技術に変更することで、太陽電池の材料コストを下げられるという話をしました。HBS 学生とのディスカッションでは、知的所有権や将来の工場移転の可能性等について話し合いました。学生達は 3 人の起業家の方々、また HBS 卒業生である竹川氏に関わる INTILAQ 東北イノベーションセンターの素晴らしい設備やコミュニティから大きな刺激をいただきました。

福島ヤクルト販売株式会社と福島成蹊高等学校訪問

東北での最終日、HBS 学生は福島に向かい、福島ヤクルト販売株式と福島成蹊高等学校訪問して温かい歓迎を受けました。

福島ヤクルト販売株式会社:

ヤクルトは乳酸菌飲料と独自の宅配サービスモデルで知られる食品会社です。HBS 学生は福島の子会社の個人宅や会社等に宅配するヤクルトレディに同行して体験し、その後福島ヤクルト販売株式会社代表取締役会長 渡邊 博美氏にお話をお伺いしました。HBS 学生はヤクルトレディが顧客と信頼関係を築いていることに感銘を受けました。さらに、震災時の危機管理の際に渡邊会長がとった行動についてお話をお伺いして心を動かされました。その後の質疑応答のセッションでは、ヤクルトのユニークなビジネスモデルについてや、渡邊会長の短期的利益を犠牲にしながらも従業員や顧客を守った勇敢な決断に関して等、学生からたくさんの質問が寄せられ、活気あふれるセッションとなりました。

福島成蹊高等学校訪問:

地元の私立高校である福島成蹊高等学校では、(1) 生徒によるプレゼンテーション、(2) 茶道部による茶道体験 (3) 安全なエネルギーや女子向けのメンタープログラム等、生徒の取り組みに対するコンサルティング、の 3 つを行いました。福島成蹊高校の生徒さんが全てのプログラムを取り仕切り、素晴らしいおもてなしをしてくれました。HBS 学生

の多くは、福島成蹊高等学校の生徒さん達による「花は咲く」の合唱がこの IFC の授業での一番のハイライトだったと語っていました。HBS 学生のアヴィーラ・グアディオーラは「生徒さん達が自分達の文化や伝統を守ることに熱心に取り組んでいることが、とても感動的でした。彼らは非常に賢く邁進しています。震災の後の原発爆発の後、福島の一部から移動せざるを得ず、また現在ひどいじめに遭っている子供たちもいると聞いて心が痛みました。この地域から逆境にも負けない素晴らしいリーダーが育つことを強く信じています。」成蹊高等学校の生徒さん達も HBS 学生から触発され、この交流を「目からうろこだった。」「人生を変えるような出来事だった。」と語ってくれました。男子生徒の1人は「HBS 学生は親切に私たちの話を聞いてくれ、自分達では思いつかないようなアイデアを提案してくれました。私たちにとって素晴らしいロールモデルです。」とコメントしてくれました。



福島成蹊高等学校にて

東京での全体活動

ビジネスと文化体験

HBS 学生は東京で観光や様々な文化体験を楽しみました。相撲の稽古見学や寿司作り体験、浅草で着物を着付けしてもらいモデル気分街を散策したりなどしました。中でもサントリーを訪問し日本のウイスキーのテイスティング体験は非常に好評でした。また日本在住の HBS 卒業生が企画してくれたカラオケも大好評でした。

また、ユニクロやセオリーのブランドでおなじみの株式会社ファーストリテイリングの柳井正 CEO を訪問しました。柳井氏と学生は率直なユニクロのグローバル戦略や運動選手とのスポンサー契約、起業、アメリカの政治等について率直な意見交換を行いました。

振り返りのセッションとクロージング・ディナー

Japan IFC 2017 の最終日、1月13日には、学生43名が1人ずつ Japan IFC を最もよく表現する一枚の写真を選び、その写真を見せながら10日間何を学んだかについて、HBS の卒業生や IFC アークヒルズクラブのメンバーの前で発表しました。クリスティン・ローデスとイレーネ・ラフィは秋保ワイナリーの CEO の毛利親房氏がリーダーシップの別のあり方について教えてくれたと述べました。他の学生は日本の国で感じたことや、東北の人々が逆境に立ち向かおうとしていることについてなど、それぞれ感想を述べました。Japan IFC2017 は東京湾の夜景を楽しむ屋形船でのディナーとカラオケで幕を閉じました。



毛利氏と秋保ワイナリーチーム



屋形船でのパーティー

9つのプロジェクト・パートナーの皆様、福島ヤクルト販売株式会社、福島成蹊高等学校、仙台市、ファースト・リテイリング、卒業生のジェフ・マクニール氏(MBA 1980)、竹川隆司氏(MBA 2006)、また、小林亮介氏(2014 ハーバード大卒)率いる10名のボランティア通訳の皆さん、その他ご協力いただいた皆様方に、素晴らしい学びの機会をいただきましたことをハーバード・ビジネス・スクールのグローバル・エクスペリエンス・オフィスと日本リサーチセンター一同心より感謝申し上げます。最後に、IFCの行き先として日本を選んできた43名のHBS学生の皆さんに感謝すると共に、将来また日本に戻って来てくれることを願っています。